

# 民俗行事における外部者と情報保存における困難

— 山形県上山市における民俗行事「加勢鳥」を事例に —

Outsiders and the Difficulty of Knowledge Preservation in Folk Event

— A Case Study of the Folk Event "Kasedori" in Kaminoyama City, Yamagata Prefecture —

松田 俊介 MATSUDA Shunsuke

## 要 旨

山形県上山市に伝わる民俗行事「加勢鳥」は、毎年2月11日に上山城下および、市街地で実施される「奇習」とされ、地域住民と多様な外部者によって営まれる、外部参加型の注目すべき民俗事例といえる。この行事では、地域内・地域外の出身者たちが、ともに「ケンダイ」という藁ミノをかぶって、奇声を発して街を練り歩く。加勢鳥は、江戸時代からの伝統を持つが、明治維新の折に廃止後、1959年に復活したという歴史的経緯を持つ。その後、保存会の手により改良を加えられながら、地域のあらゆる年代・立場の人々と、地域外の人々を参加者として積極的に巻き込みつつ、人気を博すようになった。

本稿においては、上山の加勢鳥を事例に、内部／外部の人々にいかなる関係性がありうるか、民俗行事の情報をいかにして保存し、継承していくかを追究した。

加勢鳥は、近代化による産業構造変化から、人口減少、コロナ禍を経て、地域行事の担い手が、他者性を受け入れることと、自文化の本来性を守ることとのせめぎあいをパフォーマンスの裏側に抱えてきた。民俗行事の情報保存においては、そうした社会的文脈をふまえ、民俗誌的な記述をあわせてこそ、はじめて動態性を帯びた情報として外部化できることを指摘した。

キーワード：民俗行事 加勢鳥 来訪神行事 外部者 情報保存

## 1. はじめに

日本の各地域における民俗の衰退が唱えられて久しく、とくに地域行事におけるものづくりや演舞など、高度な技術を要する民衆の知が喪失の憂き目に合う事例は、近年に枚挙にいとまがない<sup>(1)</sup>。2020年に世界規模化したコロナ禍は、そうした衰退の憂き目にある日本の民俗に追い打ちをかける、もしくはとどめとなりかねない脅威であるといえる。さまざまな行事が中止せざるを得ず、伝承の機会自体が失われるなかで、一度途切れれば再生困難なローカルな知の継承をいかにして維持していくか。多くの地域が苦慮し、方策を講じているところであり、この問題への実社会的な検討は、地域研究を専門とする人文研究者の急務となった<sup>(2)</sup>。

一方で現場においては、徐々に感染対策をとったうえで開催されるようになり、行事の実施映像のアップロードや、ライブ配信サイトでの生放送など、情報技術を用いた、当地にとって新たな試みがされる状況も見られるようになった。

筆者がここまで複数地域で現地調査を行ってきたかぎりにおいても、コロナ禍以来、「地域の行事を後世に残していきたい」「来場を差し控えた人々にも自宅にいながらにして見てもらいたい」といったモチベーションが高まり、動画公開、ライブ配信等が踏み切られた事例は数多い(松田 2023)。これは、人々が学校・職場などで情報端末を日常的に扱うようになり、民俗を情報化させていくことのハードルが下げられたという側面が色濃く、「コロナ禍のなかで開催決行した行事でのポジティブな活動」として称揚する質的研究もある(塚原 2021)。

コロナ禍が「対処できる災い」として受け入れられ、断行と休止とのせめぎあいのなかで語られるようになると、「行事が縮小したときの、世間的な圧力などへの視点」からみた「脆弱性論」、行事が通常開催したときの、意義が見直されている場への視点」からみた「原点回帰論」などの文脈で、多義的に議論されるようになった(三隅 2022)。しかし、現場においても学界においても、その都度の実際的な状況を



写真1 2021年に縮小開催された加勢鳥。上山城下における演舞 (撮影：外山匠)

もとに諮る主題として、合意形成や困難克服についての統一的理解をもたず、対応されている状況は続いている。現在の民俗行事研究の背景として、現場での合意形成や継承等の対処の事例の集積と、その土台となる実態把握とが目下の課題としてある。

こうした状況にあって、山形県上山市の加勢鳥【写真1】は、地域住民と多様な外部者による民俗行事として注目すべき事例といえる。本行事は、毎年2月11日に上山城下および、市街地で実施される「奇習」とされ、「ケンダイ」という藁ミノをかぶった青年たちが奇声を発して街を練り歩くものである。

江戸時代からの伝統を持つが、明治維新の折に廃止後、1959年に復活したという歴史的経緯を持つ。その後、保存会の手により改良を加えられながら、地域のあらゆる年代・立場の人々と、地域外の人々を参加者として積極的に巻き込みつつ、人気を博すようになった(加藤 2004; 2020)。2020年よりのコロナ禍を受けてからは、2021年は中止、2022年は入念な感染対策が行われたうえで、地元保存会のみでの演舞で縮小開催となったものの、2023年、2024年は通常開催にこぎつけ、再びコロナ禍以前を上回る盛り上がりを見せている。その過程では、演舞や祭具制作などの継承の取り組みをめぐる、行事へのさまざまな問い直しがあった。

そこで本研究では、この上山の加勢鳥を事例として、コロナ禍のみならずさまざまな障害に瀕する民俗について、「振興のために、内部／外部の人々にいかなる関係性がありうるか」「民俗行事の情報をいかにして保存し、継承していくか」を追究していく。なお、本研究は、2021年12月から2024年2月までの行事前後や外部公演等を実施した、準備・実行状

況の参与観察調査と、参観者・関係者等への断続的なインタビュー調査に基づく。

## 2. 上山における加勢鳥

### 2-1 日本民俗における「かせどり」

日本民俗において「かせどり」と呼ばれる行事は、小正月の来訪神行事とされ、地域ごとに相違するが、東北地方を中心とした日本の各所に分布する(加藤 2020: 12)。「稼ぎ取り」「稼ぎ鳥」「加勢取り」「火勢とり」などの由来(明確な語義は明らかではない(民俗学研究所編 1985: 257))を持って、村の青少年たちが藁ミノの異装に扮し、鳥の鳴き真似をしながら、家々を回っていく行事である。「明治の終わりごろまでは県内各地で行われていた」とされるように(安彦 1983: 46)、かつては山形県内に同様の事例が数多く確認できていた。

小正月の来訪神行事は、歳神を迎える行事で全国的に見られ、秋田県男鹿半島の「ナマハゲ」などと系統を同じくして、異装の風貌で家々を訪れ、祝言を述べて回る行事である。カセドリ／来訪神行事の分布については、加藤和徳(2020)が、集成的な研究を実施しており、その多様性・多義性についても確認できる。来訪神行事の民俗概念については、以下のような見解がある。

簑笠、頭巾、仮面等を装い、唱えごとや音響をもって、家々を訪ねる存在で、全国的に広く分布。年の改まった一夜遠い土地から来る神の聲によって、その一年の豊かに幸多かれと祝われることを期待していた(民俗学研究所編 1985: 256)。

すなわち、豊作や商売繁盛、火伏などさまざまな幸運を招きよせるべく、年の移り変わりで、遠方からの神を歓待することが本義とされていた。一方でここには、地域に祝福をあたえる神は人の居住地に常在せず、外からの「来訪者」としてであるという日本民俗の信仰観・空間観、異人歓待儀礼としての他者概念などが見受けられる。

### 2-2 上山における加勢鳥

上山において現在実施されている加勢鳥の来歴については、地域で「寛永年間に始まった／400年前よりの歴史」と共有されているが、これについては明確な根拠資料がなく、今後検討しておかなければならない<sup>(3)</sup>。伝承においては、江戸



図1 1865年の岷岳画の写しにある上山の「かせとり」(湯上和彦 1980)

時代の正月13日、高野村の若者たちが城に呼ばれて披露していた演舞が「御前カセ」、正月に若衆たちが火伏のために町で練り歩いた演舞が「町方カセ」として伝わっており、これが現在の様式の基盤ともなっている<sup>(4)</sup>(加藤 2020: 20-22)【図1】。ところが、1871年、明治維新後、この行事は藩政時代の旧慣として、明治政府より廃止を宣告された。これは住民からの「防火の行事」という主張により、一度は復活したが、1896年に改めて全面廃止となった。それから63年後の1959年、当時の皇太子(平成天皇)が第14回国民体育冬季大会の折、上山に臨席したさい、その歓迎のために地元の有志が「加勢鳥」を復活させ、披露したところ、これがきっかけとなって、加勢鳥の本格復活の気運が高まり、1986年には上山市民俗行事「加勢鳥」保存会が結成されることとなった。現保存会のメンバーからの聞き取りによれば、復活のときは、演舞や祭具作りについて、だれも詳細を知らず、「おそらくこういうものであったらう」という手探りで再現だったという<sup>(5)</sup>。

1987年より保存会は、民族歌舞団「わらび座」(秋田県田沢湖町)に赴き、演技等研修を受け、舞と歌の技術を学んだ。保存会の古老によれば、「魅力をもった舞となるように」「だれにでも親しみやすくなるように」振り付けと歌を作成したのだという。

これ以降も、保存会によるさまざまな活動によって、現代の加勢鳥が形作られていった(囃子連「上山火勢太鼓」の結成、記念誌の刊行、外部公演、出張公演、地域教育活動、出前カセ、各種メディアでの出演等)。とくに方向性として目立ったのが、地域外の外部者を加勢鳥の参加者として巻き込んでいく動きである。これについては次章以降で詳述していく。以上のような廃止と復活、そして新たな展開の経緯があっ

たため、加藤和徳は「各領内の近郷近在で行われていた来訪神の「かせどり」は、江戸時代の末期で消滅したといっても過言ではない」「いわゆる「新習・加勢鳥」として解釈している(2020: 59)。たしかに、現在の上山における加勢鳥は、かつてのありようを変え、来訪神行事としての民俗的意味合いを薄めているといえる。しかし、「伝統の保存・継承を通じて、地域の文化向上と活性化に貢献した団体」として、2016年にサントリー地域文化賞を受賞したように、内外の地域住民や行政・メディア・企業などにより、教育や地域振興に資する文化活動としての価値を見込まれている。

### 3. 加勢鳥の実際

#### 3-1 加勢鳥の運営体

本事例の舞台となる上山市は、上山藩の城下町、奥州街道の宿場町、上山温泉の温泉町として発展してきた。1947年時点での人口が42,550人、世帯数7,300戸であったが、2024年2月末時点において人口27,993人、世帯数11,216戸となっており、年代人口比率<sup>(6)</sup>もあわせると、典型的な人口減少・少子高齢化地域となっている(上山市 2024)。

加勢鳥の運営は、基本的にこの上山市住民の青年層以降の年代によって行われる。運営団体名称は、前出の「上山市民俗行事「加勢鳥」保存会」であり、2024年時点では約40名、上山市観光物産協会が事務局となって構成される。近年、30-40代の上山市民青年層が声がけをした成果があって、その世代がボリューム層となって営まれている。また、太鼓や囃子・鐘等を奏でる、楽隊サポーター「上山火勢太鼓」が10名程度で組織され、加勢鳥の演舞に不可欠な存在となっている。

加勢鳥の運営で独特な点は、「外部サポーター」の存在といえる。上山の保存会員が声がけをして、地域外(県内・県外より)から、加勢鳥の演舞や裏方スタッフとして賛助する有志で、全国に数十名と見込まれている。加勢鳥は演舞が終わった後に大々的な打ち上げが開かれるが、そうした場での外部の人々との交流こそが、保存会の人々にとって重要視されていた。

加勢鳥の演者は、地域外に向けてウェブで募集しており、抽選で選ばれた人々と、保存会会員によって構成される。2024年は過去最多の38羽(内訳は男性29羽・女性9羽、うち保存会8羽<sup>(7)</sup>)で、ほとんどが上山市外からで、山形県外からの参加者が過半数だった。保存会によれば、外部者・女性・外国人の枠を設けて、積極的に参加に呼びかける方針だという。

上記のような構成で、2024年の実施では総勢100名体制で実施された。

### 3-2 行事次第

上記のような背景をふまえながら、現行の上山の奇習・「加勢鳥」は実際にどのようにして営まれているか。以下では、2024年2月11日調査時点での行事の次第【表1】を時系列的に追って述べることとする。

表1 当日(2024/2/11)のタイムテーブル

時間	内容
08:00	保存会会員集合
08:30	一般参加者集合、全体挨拶
08:45	演舞指導、移動
10:00	祈願式
10:40	上山城での演舞
10:50	町を練り歩きつつ演舞
12:40	JRかみのやま温泉駅にて演舞
13:20	上市市各所で午後の演舞(15:30了)
17:00	打ち上げ

#### 【事前準備】

保存会は、年間数回程度の役員会議を開き、当年度の実施の方針、外部公演等の企画や、メディア対応など、運営全般について検討する。また、加勢鳥本番のための大規模な準備は、行事実施直前の日付に行われる。「けんだいの館」という祭具保管庫より、ケンダイ・草鞋・纏等の祭具を取り出したり、演舞舞台を雪かきなどで整備したりする。

#### 【2024年2月11日】(祭礼当日)

##### 08:00 保存会会員集合

保存会会員は、主要舞台である上山城の近くにある月岡ホテルの広間に集合する。役員は、当日の運営の詰めの打ち合わせを行い、加勢鳥演者を担当する会員は、いち早く着付け(頭部に手ぬぐい・腹部にさらし・短パン・靴下・体に保湿クリームを塗り込む)を行っておく。

##### 08:30 一般参加者集合、全体挨拶

一般の加勢鳥演者も来場し、保存会会員の手引きを受けつつ、受付と着付けを行う。そろってきた頃合いで、会長・役員・事務局らがそれぞれ挨拶しつつ、加勢鳥の由来説明や、現況・方針の説明、業務連絡、資料配布などを行っていく。

##### 08:45 演舞指導、移動

10名程度の巡回チーム(A,B)ごとに分かれ、それぞれに熟達者2,3名が、加勢鳥の演者への演舞指導を実施する【写真2】。ホテル内の広間において、火勢太鼓の演奏のもと、演舞のひとつひとつの動作を手本として実演し、それを実際に演者に踊らせていく。基本的には「やってみせ、やらせてみせる」方式で、数回リハーサル形式での指導のみで、各チーム10分程度でレクチャーは終了した。そこからは各自空き時間にめいめいで、ステップを確認していた。指導が終わったチームから、ベンチコートと草鞋を身につけ、上山城へと移動する。

##### 10:00 祈願式

主要な舞台となる上山城城門前広場では、保存会によって、祈願式と演舞場が設営されている。祈願式直前で、すでに場内が見物客であふれかえっている状況だった。見物客の中には、外国人観光客や加勢鳥の取材に訪れた報道関係者の姿もあった。

祈願式は、加勢鳥の実施と、地域と参観者らの安寧を祈願するもので、開式宣言、月岡神社宮司による祓・祝詞奏上、主要役員による玉串奉奠、上市市長挨拶、加勢鳥の由来説明、加勢鳥紹介、宣誓、閉式宣言が行われる。「加勢鳥紹介」では、加勢鳥の演者ひとりひとりの名前・出身・参加回数がアナウンスされ、会場全体より拍手で称えられる。閉式宣言されたあと、演者と役員・来賓の記念撮影が行われ、上山城での演舞の準備となる。

##### 10:40 上山城での演舞

加勢鳥の演者は、ケンダイを着用して加勢鳥に扮すると、演舞会場に入場し、点火地点を囲むように等間隔に輪になる。これが演舞の基本的な陣形となる。城門前の石階段の手前に用意されていた加勢太鼓1点と小型の加勢太鼓1点が、奏者によって演舞会場の近辺に移動され、演奏の準備が整う。

上山城城門前で実施する加勢鳥演舞は、「御前カセ」と呼ばれるものである。先達の「加勢鳥様が御出ましたぞ」という口上の後、先達と演奏者が同時進行で歌謡と演奏を行い、これに合わせて纏持ちが纏を振り回し、加勢鳥が歌謡を口ずさんで舞踊る。演舞開始と同時に、演舞会場の周辺に参集する見物人は、用意されたバケツと柄杓を使って加勢鳥に祝い水を浴びせかけはじめ、これを浴びた加勢鳥は体を横にふるわせて水しぶきを参観者に浴びせ返す。この様子を観て加勢鳥を撮影する見物人も多く見受



写真2 加勢鳥の当日レクチャー(撮影：烏眞尋)



写真3 市街における加勢鳥演舞(撮影：下嶋壮汰)

けられた。これを、Aグループ→Bグループの順に実施する。

#### 10：50 町を練り歩きつつ演舞

かつての町方カセを模して、上山市城下町を練り歩きつつ、各所で演舞が行われる【写真3】。Aグループ、Bグループ、それぞれが上山城から別ルートでかみのやま温泉駅へと向かって進行していく。グループは、太鼓車に乗る太鼓役・お囃子役・警備員・歌手・加勢鳥演者・物販などの人員で構成される。町内のさまざまな店舗が、祝い水を用意して、多くの参観客が演舞する加勢鳥に水を浴びせる。A・B両グループがほぼ同時刻にかみのやま温泉駅で落ち合う。

#### 12：40 JRかみのやま温泉駅にて演舞

JRかみのやま温泉駅の西口駅前ロータリーで、多くの参観客が詰めかけ、見守られるなか、合流した加勢鳥グループ全体が大きな輪をつくって大規模な演舞が準備される。事前に、演舞場に祝い水と柄杓が入ったバケツが設置され、火勢太鼓の演奏のもと、上山城での演舞と同様に、午前の部・最後の演舞が披露される。駅の周辺には、さまざまな名産グルメや加勢鳥グッズの売店が立ち並び、商品を買求める見物人の姿も見受けられた。

演舞終了後、加勢鳥演者たちは演舞会場で、参観客との会話や撮影に応じたあとは退場し、駅舎内で一旦、昼休憩・昼食(保存会が準備したおにぎり・豚汁など)を取って午後の部にのぞむ。

#### 13：20 上山市各所で午後の演舞

短時間の休憩を終えて、加勢鳥演者たちはA・B各グループに分かれて、マイクロバスで移動し、市内の各所(古くからある旅館や店舗、地元スーパー、消防署等<sup>8)</sup>)で「商売繁盛・火の用心」を祈願するべく演舞を実施する。各店の関係者が、準備した祝い水を浴びせ、加勢鳥からの祝福を受けると、加勢鳥はまた別の演舞場所に移動していく。

最後に地元スーパーの駐車場でA・Bグループが合流し、全体による演舞を実施して、当日の加勢鳥行事は終了となる(15：30ごろ)。

#### 17：00 打ち上げ

役員や加勢鳥の演者と火勢太鼓の奏者は、月岡ホテルに戻り、温泉に入るなどで一旦休憩したあと、宴会場で打ち上げとなる。保存会役員は「祭りよりもこちらが本番。ここでいろんな人と親交を深めていくのがたのしい」と述べ、この打ち上げの地元民にとっての重みを語っていた。

## 4. 民俗行事における外部者と情報保存

### 4-1 演舞の指導と実際

ここで本研究での目的に立ち返り、民俗芸能保存の主題における、演舞の指導と実際についてとくに取り上げておく。上記の次第の説明で述べたように、加勢鳥の演舞の指導は、設けられている時間が10分程度で、あとは空き時間に各自が確認しようという、ごく簡素なものである。通常開催のときの加勢鳥演者の大半は外部者で、はじめて参加する人も多いので、皆がうろ覚えで未熟な状態で本番に挑むことになる。

保存会のなかで特段に研修・練習があるというわけでもない。保存会会員で長年にわたって演者を担当している人が、振り付けについてはうろ覚えであったり、細かい所作については確証を持って理解している人がほとんどいなかったりする<sup>9)</sup>。変則バリエーションなどもあり、加勢鳥の振り付けの全体像は、それなりに情報量が多いはずだが、それを詳細に説明する網羅的なテキストは存在しない(少なくとも関係者によって作られていない)。これは、上山の加勢鳥の保存会の「外部者への考え方」によるところが大きい。保存会会長は、本件について以下のように述べていた。

あえてマニュアルは用意していません。口づてで直接教えていくことが重要。あのくらいの時間がちょうどいいんです(保存会会長60代男性)[丸括弧内筆者、以下同様]。

すなわち、マニュアルを渡してめいめいで演舞をマスターするというより、初心者が練習会で試行錯誤しながら、また保存会員がコミュニケーションを取りながら教えていくことに価値が置かれているということになる。また、別の保存会会員は、以下のように述べていた。

あまりきっちりやることを考えなくていいんです。いろんな人が入れるように(保存会会員50代男性)。

たしかに、加勢鳥が、統制のとれた美しい演舞を売りにしていたのであれば、現行の実施のように全国から志願者が多数応募して、さまざまな背景をもつ人々の演舞で彩られるかたちにはなっていなかっただろう。現在の加勢鳥は、ほどよくゆるくさせられており、演舞のミスや失敗が入り混じり、さまざまな人々が参入しやすいかたちになっているといえる。

そうした視点に立てば、加勢鳥演舞の実際においても、終始笑いの絶えない、混沌とした雰囲気醸成していた。ステップをし損なう、とっさにベアが組めない、間違えておどける、それが参観客に笑われる、祝い水の加減が効かず大量の水がかかる、観客にも水しぶきがかかる、足を滑らす、ワラをひばられる、観客が飛び入り参加する…など、一巡が整然と行われることはほぼない。スムーズに進行するというよりは、トラブル・ハプニングの連続であり、それに乗じた加勢鳥と観客との乱発的なコミュニケーション(アドリブ、祝い水をかける子どもへのいじり、カメラ前でのパフォーマンスなど)が特徴に行われる。

いわば、あえて入念なマニュアル作りやレクチャーを避けることで、未熟な状態(いわばヴァルネラビリティ<sup>10)</sup>)が醸され、他者の参与を誘発する効果もたらされているといえる。

#### 4-2 民俗行事の情報保存の困難

上記のような経緯はあるが、保存会会員も加勢鳥を一種の民俗芸能としてとらえ、この技術を保存し、継承していくためにさまざまな労力をかけている。毎年、保存会で撮影・

録音を実施し、唄・お囃子を譜面化、演舞を図示化するなど、継承への取り組みを実施している。

しかし、民俗芸能はそれぞれ独自性が高く、言語化できない要素(動作・声の強弱や、言葉の抑揚等)が多いため、記録が複雑で一般化させづらい。近年、さまざまな民俗芸能の現場で映像がよく利用されてはいるが<sup>11)</sup>、そのみでは不十分な要素も数多い。そして時としてその情報の複雑性が継承の失敗にもつながっていく。より精細な民俗芸能保存の発展については、動画や楽譜、テキスト、多様な図示、モーションキャプチャーによる解析など、さまざまな方法が検討されており、それぞれで成果はあげられてきた(俵木2018: 168-181)が、現場ではそもそも静態的な情報に依拠するあり方に後ろ向きの発言もある。

たとえば、2023年7月8日、上山の加勢鳥が地域外遠征公演したさい、当日は人手が足りなかったため、お囃子はCDの録音音声を活用することとなった。演舞が終わった後の反省会にて、保存会会員は、以下のように述べていた。

やっぱりCDじゃダメね。加勢鳥は当日の空気ですべて変わるものだから(保存会会員女性)。

このときの議論では、加勢鳥演舞は、その時の客層や天候、雰囲気などのさまざまな要素で、早くなったり遅くなったり、強くなったり弱くなったりするものであり、お囃子もその雰囲気に合わせて当意即妙に対応していくものだと語られていた。たしかに、民俗芸能の技法習得に映像は非常に有用で、いまや不可欠なものとはなっているが、加勢鳥においても、それだけで完結するものではないと言われていた。

動画があるからといって、それで十分とはならない。「どちらにしろ熟練者の手引きが必要ということですか」という問いに)そうそう。人に習わないと(保存会会員男性)。

録音音声・録画映像といった静態的な情報の活用は、民俗行事が演じられるハレの場とはそぐわないのだろう。上記のような状況をふまえれば、上山の加勢鳥をめぐる民俗行事の情報には、以下のような性質があることを念頭に置くべきといえる。

##### ①現場の一回性

…実践が一様ではなく、その都度都度で変化

## ②状況対応

…不規則な状況への対応も含めてのパフォーマンス

## ③コミュニケーション

…観客との乱発的なやりとりが演舞の前提として設定

いわば、本行事(及びおそらく本事例に類する民俗行事)は即興芸術的なパフォーマンスであり、こうした特性こそ、情報として保存していくことを困難とさせる要因がある。

## 4-3 民俗行事の外部参加をめぐる課題

そうした現代の上山の加勢鳥のあり方は、保存会会長によれば、「みんな(演者・参観客)が楽しめるものに時代に合わせて変えてきた」ことが形作っていったという。その言葉どおり、演者をつとめた外部者には、演舞とコミュニケーションを楽しみ、上山への愛着を抱く様子がうかがえた。

行事後に保存会が収集する演者へのアンケート(参加者コメント)には、「歳を重ね体が続くまで参上したいと思います。やっぱり皆さんに会いたいな。」「I am so happy to dance with you.」「ここが第二の故郷だと思ってます。」「きついですごく楽しかった。みなさんとまたやりたい。」といった、演舞体験への肯定的な発言が多く見受けられた。保存会も、外部者を積極的に呼び込む「だれもが楽しめる加勢鳥」のあり方が、現在の盛り上がりを作ってきたと捉えている。役員によれば、「加勢鳥が現在の盛り上がりを見せるようになったのは、地域外からの参観者が来たことで盛り上がり、それまで関心の薄かった地元民も触発されて興味を持つようになった」とのことであった。

そもそも、上山における人口減少と、それによる行事の担い手不足が抜本的に解決されないかぎり、①地域内と地域外から構成される安定的メンバーの確保<sup>12)</sup>と、②技術を外部化して保持していく仕組み作りという、2つの「外部化」を視野に入れた方策は、行事存続において今後も必要不可欠となるだろう。①の人的資源確保については、本事例は現行のスタイルが功を奏して、調査時点で順調であり、②については、目下の課題とすべきところである。

ただし、その半面で、一様に外部化を進めるべきということではなく、「かつての昔ながらの、上山の加勢鳥独自のありよう」を堅持すべきという志向もある。加勢鳥の役員会議では、「イベントよりも神事や伝統としての位置づけを守るべき」「加勢鳥を奇習でなく、神事としたい」といった声があった。また、関係者によれば地元住民にも「地元を向いて地域のための行事にしてほしい」(「演舞やケンダイ作成等」本来

のあり方を守っていかないと)「(技術保存は)本当は地元の人でやるのが一番」「技術は安易に公開すべきではない」といった自文化を保持していくべきという主旨の意見もあるという<sup>13)</sup>。

現時点で、上山においては上記の議論は大きな対立項はなく多様な意見が併存している状態だが、他の地域の事例においてもさまざまな民俗行事の運営体が、自文化保持にこだわっていくか、外部化していくか、さまざまな主題について選択を迫られており、それが行事の存続に結びついてさえいる(大平・Golubchenko・谷口 2023など)。そうした行事の未来のありようを議論する、内／外をめぐる交渉過程にこそ、自文化性の問い直しがあり、調査者がその行事を動的に理解するための民俗情報の本質があるといえるだろう。

## 5. おわりに

加勢鳥の役員会議において、加勢鳥について「本来」「伝統」といった言葉がでたので、筆者は「その「本来」「伝統」というのは、復活以降の加勢鳥のあり方を指していますか?」と問いかけた。すると、ひとりが「そうですね。あのとき、Sさん(仮名)たちで作った加勢鳥が元の形」と述べ、他の役員もそれに同意していた。保存会においては、江戸時代より東北に分布する新春行事としてあった、そもそもの古形としての加勢鳥の真正性には拘泥せず、1959年以来に住民たちで伝統を再創造して構築していった加勢鳥を、伝統的・本来的なものと位置づけていたのである。

それだけにもともの来訪神行事としての歴史遺産的な意義は薄く、現在の「だれもが目を惹かれる奇祭」としてのあり方は、人によっては「奇をてらったイベント」、あるいは本来の歴史的脈を断絶する「外連」としてみられる側面もある(中沢 1983: 226)。しかし、地域住民のさまざまな試行錯誤によって、新たな演舞と唄がつけられ、当地の民具・囃子・民話・伝承等の要素がつなぎ合わされ、地域外の人々を積極的に呼び込み、加勢鳥は地域文化としての独特な価値づけを得た。こうした復活の過程そのものが基点となって、ひとつの伝統をなす上山の加勢鳥のあり方は、非常にビビッドな創造的営為といえるだろう。

そして、地域の行事に、他者性の参入を積極的に受け入れ、そのリソースを活用する加勢鳥の試みは、ある程度成功してきたといえる。純粋な担い手不足解消となっただけでなく、保存会と外部者との相互交流の場を作り、また、異種混濁な

祝祭としての非日常性の演出ともなった。一方で、他者性や情報をめぐって多様な意見が長年にわたり交わされてきたこともわかった。加勢島の事例では、近代化による産業構造変化から、人口減少、コロナ禍を経て、地域行事の担い手が、他者性を受け入れることと、自文化の本来性を守ることとのせめぎあいをパフォーマンスの裏側<sup>9)</sup>に抱えていたのである。

民俗行事の情報保存においては、まさにそうした社会的文脈こそをふまえないければならない。ひとつひとつのパフォーマンスの過程や技術にどのような背景があるか、どのような問い直しがあったか、どのように外部にアプローチしていったか。民俗誌的な記述をあわせてこそ、はじめて動態性を帯びた情報として外部化できる。上山の加勢島は、そうした内／外をめぐる大きな変革をふまえて、調査時点でも情報／他者性をめぐる継続した議論に至っている事例であり、今後のさまざまな地域の民俗行事の指針として重要なケーススタディとしてとらえられるだろう。

#### 謝辞

すべてのお名前をあげることはできないが、加勢島保存会会長・大澤健一氏、保存会会員・鈴木邦男氏、齋藤誠氏、高橋義明氏、事務局・長橋圭子氏をはじめ、フィールドワークでは多くの方々にお世話になった。本研究でご協力いただいたすべての方々に厚く御礼申し上げます。

本研究は、科学研究費助成事業(若手研究「コロナ禍における東北民俗行事の情報保存活動に関する研究」課題番号23K17166、2023-2024年度)の助成を受けて実施したものである。また、本研究の行事タイムテーブル部分等は、大友竣平氏・後藤智也氏をはじめとした東北芸術工科大学歴史遺産学科松田研究室ゼミ生にご協力いただいた。

#### 註

(1)民俗行事の継承の危機の問題は、これまでおもに民俗誌的近代の議論(近代化を原因とした民俗変化を主題とした議論)で語られてきたが(松田 2017a ; 2017b など)、近年では状況が変化して「祭りじまい(いかに祭りを閉じていくか)」の議論として検討されている(大平・Golubchenko・谷口 2023など)。岩手県奥州市の黒石寺で長年行われてきた蘇民祭は、関係者の高齢化・担い手不足が起因して、2024年2月17日をもって1000年以上の歴史に幕を閉じ、大きな反響を呼んだ。再現の困難な無形文化財が消失するリスクは大きいと、保護の必要性が議論されている(日本経済新聞社

2017年1月3日)。

- (2)さまざまな人文科学・社会科学・情報科学等の領域において、コロナ禍をめぐる文化保存の議論は進められているが、民俗行事については、その性質上、当事者たちが情報発信に積極的でないものも多く、実態把握はときに非常に困難といわざるをえない(伊藤 2022)。
- (3)加藤によれば、出処は当時の保存会役員によるものだったという。「ここでいう寛永頃とは、当時の藩主は、土岐山城主頼行(寛永五年移封)が、農民達に城内を開放し、花見をさせた程の農民思いの城主なので、おそらく、当時より(かせどり)始まったと推測しての事だけ」(2020 : 36)と断言しており、寛永説の根拠の弱さについて言及した。
- (4)菅沼定昭が幕末から明治期の上山での見聞を記録した『上山見聞随筆』(1976(1902) : 74)には、以下のように描かれている。
- 一、加勢島ということただ所の旧慣によって行うことなり其いわれ詳かならずさて昔より高野村の者御前加勢といて毎年正月十三日御殿にあがるかせ二人なりといふて附人一人なり其時御殿にては新しき手桶柄杓にて水をかけられ御酒下されの上に青指という銭壺貫文下されになりしものなりまた町方にての加勢は正月十五日なり(略)
- (5)ケンダイ(加勢島がかぶる藁ミノ)に至っては、「子どもの頃に見ていたので形は知っている」程度であったという。
- (6)2023年1月1日時点での年少人口率(15歳未満)は8.96%、高齢人口率(65歳以上)は39.74%となっている(上山市 2024)。
- (7)2024年は、最多出場は25回目という栃木県出身の男性、最年長参加は山辺町出身の60歳男性、最年少参加は東京都出身の21歳女性、外国籍参加は東京都在住のポーランド出身女性1名だった。外部者・女性・外国籍参加については、保存会会員によると、「そういう枠を設けている」とのことだった。また、上山市内からの参加者を「地鶏」、市外からの参加者を「渡り鳥」と呼んでいる。
- (8)十五屋前、マルソウたかはし前、清水屋前、石井伊惣時商店前、山小酒店前、新丁坂下、下大湯前、湯町、新湯、葉山、カミン前、駅前広場、ヤマザワ前、おーばん前、ヨークベニマル上山店、各旅館前付近、警察署、消防本部等を巡る。
- (9)筆者が地域公演に同行したさい、「右足からはじまるときもあれば、左足からのときもあった」「人によってフリが違う」「前後どちらの人と組んで踊るかは、決まっていない」といった会員同士のやりとりがあり、厳格な決めがなく、理解があいまいであったと確認できた。
- (10)ヴァルネラビリティ(vulnerability)は直訳すると「脆弱性」で、さまざまな意味合いで使われているが、本研究では、ひ弱い立場



の状況を生かし、相手や事態に関わることを用いる(金子1992など)。

- (11)筆者が、本研究と同様のテーマをもって山形県飽海郡遊佐町の杉沢比山番楽を調査したさい、現地の担い手は「最近でいちばん変わったのは、みんな動画を見ながら覚えるようになったことだね」と述べた。携帯情報端末と動画サイトの普及から、動画の閲覧やデータのやりとりがごく身近なものとなり、民俗芸能の習得にも動画が不可欠なものとなった。
- (12)ただし、調査者側からは現地の詳細な状況が不明瞭なこともあり、見解のズレには注意しなければならない(伊藤 2022)。一見、担い手が不足した危機的状況に見えても、「○○さんとこの子が大学卒業して来年は地元に戻る」「○○さんが療養に目処がついて復帰できる」というように内的に対処されることもある。その実相は、地域内の属人的事情が関連し、調査者にとって見えづらく、方法論の一般化が困難である。
- (13)2020年、長年にわたってただひとり、加勢鳥のケンダイ制作に携わっていた担当者が急逝し、保存会では民具制作の技術継承が危ぶまれていた。鏡綾夏(2021)は、ケンダイの制作技術を研究し、動画とテキストによるマニュアルを作成することに成功した。ただし、この技術を無制限に広めることには地元にも賛否両論あり、民俗技術の保存と公開の方法が課題となった。
- (14)ゴッフマン(1974)による用語で、「表局域=パフォーマンスの表側」と対照的にある「裏局域」。パフォーマンスの意図や仕組みが表れる場として重要視された。

#### 参考文献

- 伊藤純 2022「コロナ禍における民俗芸能」日本生活学会 COVID-19 特別研究委員会編『COVID-19の現状と展望——生活学からの提言』国際文献社
- 大平航己・Golubchenko Stanislava・谷口守 2023「地域における神事の中断とその復活に関する研究」『都市計画報告集』21巻4号、363-367
- 鏡綾夏 2021「山形県上市市来訪行事「加勢鳥」の継承方法 ～聞き取り調査とケンダイ制作を通じて～」(学士学位論文、東北芸術工科大学)
- 加藤和徳 2004「小正月の訪問者「かせどり」と「まれびと」」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』3号、109-123
- 加藤和徳 2020「上ノ山小正月の来訪神「かせどり」」上市市民俗行事「加勢鳥」保存会
- 金子郁容 1992『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波書店
- 上市市 2024「令和5年度上市市の人口と世帯数」『上市市公式サイ  
ト』(2024年3月5日確認)  
<https://www.city.kaminoyama.yamagata.jp/soshiki/6/reiwa5nen-jinkou.html>
- ゴッフマン、アーヴィング 1974『行為と演技 —日常生活における自己呈示』石黒毅訳、誠信書房
- 菅沼定昭 1976(1902)『上山見聞随筆 上』上市市
- 塚原伸治 2021「祭礼とメディアの民俗学」藤野陽平・奈良雅史・近藤社秋編『モノとメディアの人類学』ナカニシヤ出版。
- 中沢新一 1983「視覚のカタストロフ」山口昌男&ヴィクター・ターナー編『見世物の人類学』三省堂
- 日本経済新聞社 2017年1月3日「無形民俗文化財の伝統行事、20県で60件休廃止」『日本経済新聞』(電子版)(2024年3月6日確認)  
[https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG03H2D\\_T00C17A1000000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG03H2D_T00C17A1000000/)
- 俵木悟 2018「第七章 文化財／文化遺産をめぐる重層的な関係と、民俗学の可能性」『文化財／文化遺産としての民俗芸能 無形文化遺産時代の研究と保護』勉誠出版
- 松田俊介 2017a「儀礼の創出と地域住民のアイデンティティ表象に関する研究 —栃木県都賀町家中の“強卵式”の事例から」『生活学論叢』第30巻、1-14
- 松田俊介 2017b「食責め儀礼における民衆文化の処世の構図 —鹿沼市発光路妙見神社の強力行事の事例より」蔵持不三也・嶋内博愛監修、伊藤純・藤井絃司・山越英嗣編『文化の遠近法』言叢社
- 松田俊介 2023「祭礼組織運営の人的課題と文化的持続可能性 —栃木県日光市七里生岡神社大祭の事例から」原知章編『文化的持続可能性とは何か —文化のゆるやかな共鳴を捉えるために』ナカニシヤ出版
- 三隅貴史 2022「コロナ禍における祭礼実施の分析」日本生活学会 COVID-19特別研究委員会編『COVID-19の現状と展望——生活学からの提言』国際文献社
- 民俗学研究所編 1985『民俗学辞典』東京堂出版
- 安彦好重 1993『神と人との間 山形のまつり 家のまつりと村のまつりを探る』日本文化社
- 湯上和気彦 1980「加勢鳥」『上山見聞随筆・付図集』上市市教育委員会